

特集

密かに宿す

終極の犯罪

超官僚主義教団の終末観

もしかしたら、この社会は
本当に終末に向かっているのかもしれない。
モノと束の間の快楽にあふれ、
日常は何の破綻も想定せず、永遠であることを装う。
しかし、何か不気味なものに社会の中心が
蝕まれていく気配だけは確実にある。
サリンとオウム真理教事件は、そんな社会の象徴だ。
恐怖を風化させてはならない。
事件を「シブの種」におとしめてはならない。

オウム真理教はなぜ
ハルマゲドンを確認したか橋爪大三郎
東京工業大学助教授

假谷さん拉致事件↓地下鉄サリン事件↓オウム真理教強制捜索と、三月はめまぐるしく事件が展開した。この原稿を書いている四月七日現在、まだ上九一色村をはじめとするオウム施設の捜索が続いている。オウム真理教は果

たして地下鉄サリン事件にかかわったのか。状況証拠はそれなりに揃いつつあるが、事件を立証する決め手が見つかったわけではない。真相はなお、霧の中にある。

これまでの捜査から、オウム真理教

が、神経ガス・サリンを合成する能力（設備と原料）を有していたことは明らかとなったようだ。けれども、その動機を有していたかどうか、はっきりしない。能力と動機が両方とも立証され、さらに、実行部隊（犯人の氏名や

指揮系統）も特定できないと、オウム真理教の疑惑が事実であったとは言えないのだ。犯行の事実が法廷で立証されるまで、「推定無罪」（訴追の段階では、被疑者は無罪との大前提から証拠を揃えていくこと）の原則をあくまで貫くのが、民主主義・法治国家のルールである。

さて、本稿は、「動機」に問題を絞ろう。不思議なことに、オウム真理教にどのような動機（教義上の必然）がありうるかという点を、誰もあまり議論しない。だが、これが理解できないと、事件の全体像はつかめないのである。

オウム真理教は、仏教系の新興宗教である。「仏教系」と言っても、たいいてい新興宗教（創価学会や立正佼成会）が日蓮系なのと違い、ヒマラヤで修行し「最終解脱」を果たしたという麻原彰晃氏を教祖とおおぐ、「原始仏教系」とでも言うべき宗派だ。出家して悟りを開くことを重視するその教義は、日本の既成宗派が忘れていた仏教の原点に還るという意味合いがあり、それなりに評価できるものだった。

すると最大の疑問は、こうしたオウム真理教がなぜ、ハルマゲドン（世界最終戦争）が間もなく起こると信じるようになったか、であろう。

ハルマゲドンと
仏教のミスマッチ

ハルマゲドンは、新約聖書「ヨハネ黙示録」第十六章第十六節に出てくる地名で、世界の最後に起こるといふ善と悪の大戦争を指す。要するに、終末論である。終末論は、一神教（ユダヤ教、キリスト教、イスラム教）にはつきもの。もともとゾロアスター教（善悪二神論）起源とも言われるが、いまでは一神教の専売特許と言ってよい。

実際これまで、世界の終末に近いと事件を起こしたカルト教団はどれも、キリスト教系の新興宗教だった。一方、仏教には終末論にあたるものはない。ハルマゲドンと出家主義の仏教とは、水と油、木に竹を接いだような取り合わせなのである。

たいいてい日本人は、宗教についてほとんど知識がないので、「世界最終戦争を唱える仏教教団」がどんなに奇妙かつミスマッチに響くか、ピンとこない。マスメディアも同じく鈍感で、その辺の突っ込みがまるで甘い。しかし、問題はまさにそこにある。ハルマゲドンと出家主義とがどう結びついているのかを理解できたなら、オウム真

理教の謎も解けるのだ。

そこで、話の順序として、終末論とは何か、そして出家主義とは何かを、まず復習しよう。そのあとで、両者の「結合」について考えよう。

終末論とは文字どおり、この世界が「終わる」と考えることをいう。簡単なのだが、もともと日本人にはこういう発想がないから、理解できない。何となく、「だんだん世の中が悪くなること」みたいに思ってしまう。でもこれは、仏教の末法思想（ブツダの死後、うんと時間が経つと、ブツダの説法が次第にすたれていくこと）のイメージであって、終末論とは関係ない。

終末とは、創造（世界がある時に始まった）神がある時に世界を造った）の裏返しである。世界がある時点で創造されたから、世界はある時点で終焉を迎える。世界の創造から終末に向かって、時間は一直線に流れている。これが、一神教の時間感覚である。世界の創造と終末とを信じるのが、神を信じるということなのである。

終末の特徴をまとめると、①ある時突然やってくる。②よいことである。なぜなら終末のあと、神は世の中をもう少しましなものにつくり直すはずだから。③一部の選ばれた者だけが、終

はしづめ だいさぶろう 1948年生まれ。東京大学文学部卒、同大学院博士課程修了。学生時代から構造主義を踏まえた「言語派社会学」の樹立を目指して執筆活動が続けてきた。主な著書に『言語ゲームと社会理論—ヴィトゲンシュタイン・ハート・ルーマン』『仏教の言説戦略』など。

末のあとと生きるのびる。この意味で終末は、一種の試練である。

一神教は「最後の審判」(神が人間を裁き、永遠の破滅/永遠の生命、の判決を与える)を信じる。「最後の審判」は、世界の終末の第二幕である。いつばうハルマゲドン、終末の予告編みたいなもの。予告編だから、なくたって構わない。

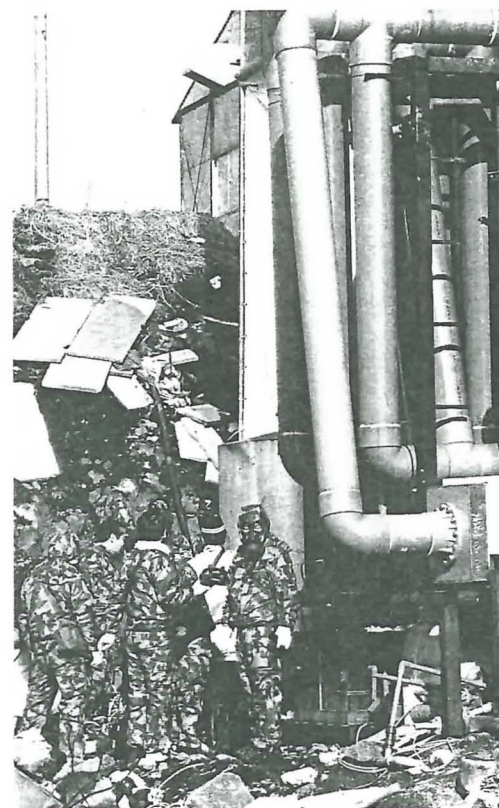
さて問題は、いつ世界の終末が訪れるのか、である。

使徒パウロは、神の国(終末)がまもなく到来する、と述べた。「まもなく」とは、数年から、長くて十年程度。ついにその日が来ると、イエス・キリストが再臨して、彼が直接人類を

統治する新しい時代が始まる。これを待望するのがキリスト教徒だが、肝心のイエス・キリストがいつまでも再臨せずに、かれこれ二千年が経ってしまつた。パウロが「何月何日」と具体的に終末の日を予言しなかったから、こういうことが可能なのだが、終末がなぜなかなか来ないのかは、キリスト教の泣きどころになっている。

次に、出家主義について考えよう。終末論と出家主義は、宗教がとる典型的な二つのタイプの戦略である。終末論が「時間差」を利用するのに対して、出家主義はいわば「空間差」を利用する。

もう少し、詳しく説明しよう。どん



警察の家宅捜索を受けた山梨県上九一色村のオウム真理教の施設

な宗教も、あるがままの現実社会に対し、あるべき理想の状態を対置する。現実社会と宗教の理想とは、多くの場合、矛盾する。そうした場合、あるがままの社会を否定し、あくまでもあるべき状態を実現するのが、宗教にとつての理想である。ところがこれは、一般に容易でない。

ユダヤ教やイスラム教では、社会を宗教の理想に近づけることで、その矛盾の解消をはかってきた。その手段が律法(宗教法)である。キリスト教は律法をもたないのに、矛盾は当面解消できない(教会と国家とが分立する)が、そのかわりに終末が訪れたあと、この矛盾が最終的に解消すると考える。

これに対してインドの宗教は、出家という方法をとる。これは、宗教の理想を実現するために、社会を離れ、どこか別の場所に、選ばれた者たちだけの共同社会をつくるという方法である。バラモン教はもとよりこうした伝統を持っていたが、仏教もそれをひき継いだ。シャカは出家したあと悟りを開き、出家の弟子たちを集めてサンガ(僧伽=仏教の修行者の共同社会)を形成した。その目的は、彼らが修行に専念でき、解脱をえやすいような環境を整えるためだった。

出家主義にとって問題なのは、世俗社会とどう関係するかという問題である。出家の目的は、世俗社会の雑音をシャットアウトするところにある。当然そこでは、世俗社会と異なったルールが適用される。サンガの戒律(具足戒)はシャカが制定した(と信じられている)もので、労働を禁じている。

このためサンガは、世俗社会と同じではありえないわけだが、その結果皮肉なことに、かえって世俗社会(在家の人びと)に依存せざるをえなくなる。乞食主義(食物を托鉢に頼ること)がその帰結だ。それでいいのだと居直らないと、出家主義はつとまらない。

経済の肥大化に伴い 政治や権力も発生

もうひとつの選択は、出家者の団体が自給自足の態勢をとることである。これは禅宗の選択であり、オウム真理教も自給自足を強調している。この場合、出家者は労働をすることになる。出家者の共同社会は、そのぶん世俗社会と似てくるだろうし、経済の肥大化に伴って、政治や権力も発生するだろう。少なくともシャカの具足戒はそんなことを正当化していない。

出家主義の宗教は、独特の時間感覚を持っている。

仏教の最終目的とは、悟りを開くこと、すなわち解脱である。オウム真理教も、この点は同じだ。そして解脱とは、人間の宿命、すなわち輪廻(カルマ)を脱することである。解脱する前の人間は、輪廻の法則(この宇宙を支配する因果律、一種の自然法則のようなもの)にとらえられている。この法則は、未来永劫続く不変の法則だ。この法則を認識・体得しつくすことで、この法則から自由になり、解脱を果たす。それが修行のなみである。

解脱を果たした存在(ブッダ)は、この世界とどういう関係にあるか。一神教の神は、世界に先立って存在しており、世界が終末を迎えたあとでも存在し続ける。世界がある間も、その外側に存在している。なぜなら世界は神が何月何日に創造したものなのであり、何月何日に消滅するものなのだ。いつばうブッダは、世界の創造者ではないから、この世界の外側に存在するわけではない。ブッダとは、修行をした人間(あくまでも世界のなかに存在する)のとりうる特別の状態である。ブッダは、この世界の法則性そのものであるから、極限的にはこの世界全体

と一致するものなのである。

仏教には、だから、「世界の終末」という考え方がない。仏典のなかには、この世界が地獄から順番に火災に包まれて崩壊する、という記述もあるが、これもあくまで世界の法則性に従って生ずる出来事であり、そのあと世界はまた一から再生する。論理的に考えて、世界が終末するには、世界の外側に世界を終末させる「意志」が必要である。一神教ではその意志を神が担う。ブッダはそうした意志ではありえない。

因果論的法則観に立つ仏教は、円環的な時間感覚をもち、終末論に立つ一神教は、直線的な時間感覚をもつ。これは、まったく相いれない二つの発想だと言えるだろう。

そこで最初の疑問に戻ろう。出家主義をとる仏教教団・オウム真理教は、なぜハルマゲドンを信じるようになったか。ここまで伝統的な宗教のロジックを説明してきたので、出家主義と終末論の組み合わせが、手術台の上のミシンとこうも重なりたいにちぐはぐだと分かってもらえたと思う。

この疑問を解明するには、オウム真理教の教義を、組織神学的に解明する必要がある。これは大仕事なので、ここではできないが、その補助線だけを

考えてみよう。

麻原彰晃『人類滅亡の真実』（オウム出版・一九九一年）という書物がある。氏の予言の書だが、巻末に『人類滅亡の真実』は、この仏教經典によった」とあり、「転輪王獅子吼經」のパーリ語原本が載っている。仏典を読んだら、世界最終戦争の予言がみつかったというのだ。《この宇宙は、創造・維持・還元（破壊）・虚空という輪廻を繰り返している。そして、この創造と還元の中間の時期に、人類が決定的な滅亡を迎える時がやってくるのである。衆生よ、そして高貴なる魂よ、これが『新約聖書』の中ではハルマゲドンとして知られている最終戦争である。……また、この軍勢力が重大な影響を与える時期とは、ノストラダムスの有名な詩に表された時期のことでもあるのだ》（92～93ページ）。

それではこの、「転輪王獅子吼經」とはどういう經典か。手元の資料を見たが、調べがつかなかった。パーリ語の經典は南伝したので、明治以前の日本には伝わらなかったし、漢訳のないものもあるのだ。同書には出典として『THE DIGHANKAYA ナーランダ版第8巻』と注記がある。『THE DIGHANKAYA』は「阿含經」（初

期仏教の教えを集成した經典）五部のうちの二つ、長部のこと。そこに含まれる經典のなかに、ハルマゲドンの予言が見つかったというわけだ。

出家主義の教団からカルト教団に変身

阿含經の成立は新約聖書より古いから、そこにハルマゲドンの予言（まして、中世のノストラダムスの予言）のことがのべてあるわけがない。いずれも著者・麻原氏の解釈ということになる。これが解釈として成り立つかどうか、「転輪王獅子吼經」のパーリ語のテキストと、麻原氏の予言（解釈）とを突き合わせてみないとわからない。それは専門家に任せるとしても、宗教を学ぶ者の常識として、次のことは言える。①世界の創造→維持→還元（破壊）→虚空というサイクルと、ハルマゲドンのな世界の終末とは何の関係もない。②創造→維持→還元（破壊）→虚空は、きわめて長期にわたるサイクルで、「一九九七年に人類最終戦争が起ころ」といった切迫した状況とは異なる。③還元（破壊）は（解脱した存在を除き）すべてを滅ぼすもので、出家者の共同社会（だけ）がそれを生き延

びると考えるのはナンセンスである。にもかかわらず、オウム真理教がハルマゲドンの予言を軸に活動したとすれば、それはオウム真理教が、何らかの必然によって、出家主義の教団から終末論的なカルト教団に変質してしまっただけを意味すると思われる。

麻原氏は、人類最終戦争が数年以内に起こると予言する。彼の予言はどのような能力によるのであろうか。一神教では、終末をもたらすのは、神の意志である。神の意志を知りえたものが、預言者となる。預言者はいわば、神のモニターなのである。

仏教に予言にあたるものがあるとすれば、それは修行の成果である。ブツダは一切知であり、すべてを知っている。いつ世界が還元（破壊）を迎えるのかも、当然知っているはずだ。麻原氏の「最終解脱」がブツダと同じレベルなのか不明だが、彼が真理（因果的法則性）を洞察している度合いに依じて予言が可能になっているのだろう。予言が当たるのは因果法則の洞察によるのだから、自然科学と同じだ。予言が当たらないければ、「解脱」のレベルが不十分だったことになってしまう。

麻原氏が終末予言に熱中するようになったのは、教団組織の拡大と関係が

あるのではないかと思われる。

仏教教団の出家者の組織（サンガ）は、対等な修行者の集まりで、平等原理が貫かれている。それは、サンガの戒律や運営規則（律蔵）をみればわかる。ただし中国や日本には、そうした教団の運営方法は伝わらなかった。

麻原氏の周囲に集まった弟子たちはごく当たり前の日本人だった。彼らは出家主義の伝統と無縁だった（近代日本の組織しか知らなかった）から、氏を頂点とするがっちりした官僚組織をこしらえてしまった。科学技術省、治療省などという中央官庁まがいの名称が、その組織体質を表している。

自ら終末つくるのがいちばん確実

こうして成立したオウム教団は、いわゆる官僚制を超えて、スターリン主義型の超官僚組織と化す運命にある。

なぜなら、彼らの組織は、①教祖（宗教上の権威）と仰ぐ麻原氏が、同時に官僚組織の頂点にも位置するため、政教一致たざるをえず、②出家主義を旨として一般社会と距離をおくため、教団は自律的傾向を強め、その支配は神聖政治（テオクラシー）のかたち

どこまでも純化していくからである。

かつて、神聖政治の一種・マルクス主義を奉じた新左翼・過激派はこうした病理を有していたが、オウム真理教も組織のうえではそっくりの構成にならざるをえないのである。

マルクス主義の話が出たついでに言うなら、マルクス主義にとって、終末Ⅱ革命、神の国Ⅱ共產主義社会であった。終末の到来は、人類史の法則（神のように絶対的・客観的なもの）によってすでに決まっているが、教団Ⅱ前衛党が主体的に努力して、革命の実現のために努力するのがよいとされる。

一神教の場合、終末をひき起こすのは神だから、原則として人間は介入できない。紀元前後、終末を信じてクムランの洞窟にこもったエッセネ派（ユダヤ教の一派）というグループがあったが、彼らは「終末が一日も早く到来しますように」と祈りの日々を過ごした。彼らは、自分たちが終末をひき起こせるとは思いもしなかった。

オウム真理教の場合は、仏教の因果（縁起）論的世界観がベースにあるので、終末の原因は人間社会に内在すると考えられることになる。神ではなしに、人間（の業）が終末をひき起こすのだ。最終解脱を果たした麻原氏は、

ブツダに等しい一切知を持つので、それを予言できる。信徒たちはそれを信じる、という構造になっている。

予言はしかし、的中するかどうかわからない。的中しなければ、麻原氏の宗教的権威に傷がつく。オウム真理教団の基礎も揺らぐだろう。

そこでいちばん確実な方法は、教団自らの手で終末をつくり出すことだ。

本当の終末が到来する前に、その予告編を上演して見せてやる。その結果、やっぱり終末はあるのだと信じた人びとが入信すれば、彼らも救われるし、場合によっては終末そのもののさえ防げるかもしれない。万一、終末が訪れなければ、それは麻原氏が防いだからだ。

終末は迫っている。早くオウムを信じないと間に合わない。そう信じる信者たちにとって、サリンの毒を地下鉄にばらまいて、たまたま死者が出たとしても、それで人類が助かるのなら、それは衆生を救う慈悲の行為（菩薩行）なのだ、ということになる。

神なき終末論という点で、オウム真理教と新左翼・過激派は同型である。予言による教勢拡大をはかったある時点から、オウム真理教はそうした過激化への必然性をそなえるに至ったのだ。■